

児童文学にとって幼なじみは 神アイテムではない

細谷 建治



*瘠一郎。どこじゃ、おまえは……

児童文学の中に描かれた幼なじみで、ぼくの頭に最初に浮かんでくるのは、『ちよんまげ手まり歌』（上野瞭 理論社 一九六八年）に出てくるおみよの幼なじみ、瘠一郎だ。と、いつても瘠一郎がこの物語に登場することはない。だから、おみよは「瘠一郎。どこじゃ、おまえは……」とさがしつづけねばならない。

『ちよんまげ手まり歌』はこわい話だ。やさしい藩のしきたりで、六歳になったおみよは「やさしいむすめ」になる。両足を切断され、山んばのいる山へのほれないようにされる。瘠一郎はお花畑にはいる。殺されてユメミ草を育てる。肥やしにされる。

ユメミ草の実は、勇ましい戦争の夢を見させてくれる。それを他国に売って、やさしい藩は生計を立てている。限られた人口を維持するために、六歳になったら「やさしい

むすめ」「やさしい若者」「お花畑にはいる」に選別される。余計な考え事を持たないように、また山を越えないようにと、生き残っても足を切られることになる。

そんなシステムの中で、おみよは足を切られ、瘠一郎は土の中に埋められる。これは、幼なじみ喪失の物語なのだ。殺されて土の中に埋められた瘠一郎を、おみよは必ずずると足を引きずりながら、さがしさまよう。そして、みどりのユメミ草の実を見つける。

ユメミ草の実を食べたおみよの前に、不思議な老人があらわれる。いつのまにか、おみよは二本の足で歩いている。老人は自分を「山んばじゃ」という。老人の手に瘠一郎のぬくもりを感じたおみよは、山を越える決心をする。山の上までたどりついたおみよは、山の向こうにも同じような国がいっぱいあることを知る。知れば知るほどに、おみよは歳をとり一人の老婆へと変わっていく。おみよは、知ったことを伝えるために、国に戻る決心をする。